弘前大学教育学部研究紀要クロスロード　第25号（2021年３月）：25―34
CROSSROADS. Fac. of Educ., Hirosaki Univ., 25（March 2021）. 25―34

地域－日本－世界をつなぐ歴史学習
―世界史の中の「民次郎一揆」―

History learning that connects Region, Japan and the World
：Positioning “The Tamijirou riot” in World history

篠　塚　明　彦*
Akihiko SHINOZUKA

要　旨

学習指導要領の改訂に伴って，2021年度から中学校社会科歴史的分野では従来に比べて世界史分野の扱いを多くすることが求められるようになった。また，高校の地理歴史科の科目構成の大幅な変更により新設される歴史総合では，中学校での歴史学習との接続を意識することが求められている。こうした中学校社会を取り巻く状況の変化に対応するため，中学校においてどのような歴史学習が可能であるのか提起することが必要となった。その際，歴史総合のなかで十分とはいえない地域史の視点を盛り込んで，中学校歴史的分野と歴史総合の接続を意識して授業構想に取り組むこととした。具体的には，19世紀初めに津軽地方でおこった民次郎一揆という歴史事象を，ロシアや西ヨーロッパ，中国という世界史の動きのなかに位置づけて，地域－日本－世界をつなげる歴史認識の育成につながることを目指して授業実践を試みた。

キーワード：中学校社会科歴史的分野　歴史総合　地域史　世界史　民次郎一揆

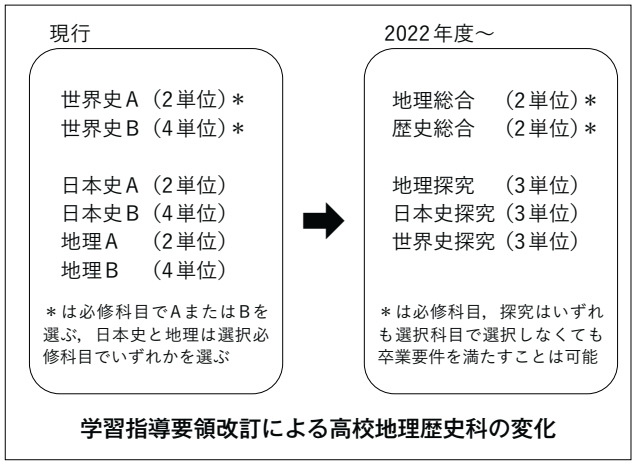
１．はじめに

2021年４月より中学校においても新しい学習指導要領に基づくカリキュラムが本格的にスタートする。今回の学習指導要領の改訂においては，「何を学ぶかだけではなく，どのように学ぶか，何ができるようになるか」ということばに象徴されるように，すべの校種，すべての教科において方法的側面を中心に大幅な変革が見られた。その一方で，内容的側面に着目してみると，中学校社会科の場合には，小学校社会科や高校地理歴史科・公民科に比して従前からの大幅な変更は見られなかったともいえる[1)]。中学校社会科における内容的側面に関する主な変更点としては，まず全体に関わる部分では授業時数の変更がある。地理的分野で従前より５時間減の115時間とされ，歴史的分野では従前より５時間増の135時間とされた（公民は従前通りの100時間）。つまり，地理的分野の時間が５時間削減され，その分，歴史的分野で５時間の増加がなされたわけである。これに伴って，地理的分野では学習内容の整理・統合がおこなわれて，〈A 世界と日本の地域構成，B 世界の様々な地域，C 日本の様々な地域〉という構成となった。また，「中核となる考察の仕方」の若干の整理･削減もなされ，〈①自然環境，②人口や都市･村落，③産業，④交通や通信，⑤その他〉の５つとなった。一方，歴史的分野では５時間の増加分を意識して，「世界史」の充実が図られ，ギリシャ・ローマ文明，ムスリム商人の役割と世界の結びつきなどが取り上げられることとなったほか，「主権者教育」への対応としてギリシャ・ローマの民主政治，男女普通選挙権の確立などを取り上げることとなった[2)]。

以上の通り，今般の改訂に伴う中学校社会科における内容的側面の変更点は，表面的にはそれほど大幅なものとは見えないだろう。しかし，実際のところは高校の地理歴史科・公民科における大幅な変更の影響を大きく受ける可能性が考えられる。特に，歴史的分野では大きな影響が考えられる。周知の通り，2022年度から高校でも学年進行で新しい学習指導要領への移行が進む。地理歴史科においては，「地理総合」，「歴史

*　弘前大学教育学部社会科教育講座　　Department of Social Education, Faculty of Education, Hirosaki University

総合」が新設されるわけだが，このうち歴史総合は，従来の日本史と世界史という枠組みを見直して，日本史と世界史を融合した全くの新しい科目となる。1949年に科目としての世界史が誕生して以来，70年以上に渡って続いてきた日本史・世界史という科目枠組みの変革がなされたわけである。この歴史総合が必修化されたことに伴い，世界史は必修から外されることとなった。世界史に関しては選択科目として「世界史探究」が新設されるが，どれほどの高校生が選択するかはわからない。現状を考えると選択者が極めて少数にとどまることも十分に考えられる[3)]。歴史総合では日本を中心に置きつつ近現代史を学ぶことになるため，世界史探究を選択しなければ，世界に目を向けた歴史学習の機会や前近代における世界諸地域の多様な文化・価値観を学ぶ機会は大幅に減少することになってしまう。



学習指導要領改訂による高校地理歴史科の変化

今般の学習指導要領改訂における，中学校社会科歴史的分野での世界史の充実ということの背景には，このような高校地理歴史科での改変が考えられるわけである。学習指導要領解説では，歴史的分野の改訂の要点として５点あげられており，そのなかの三つ目に「ウ 我が国の歴史の背景となる世界の歴史の扱いの一層の充実」として次のように述べられている。「グローバル化が進展する社会の中で，我が国の歴史の大きな流れを理解するために，世界の歴史の扱いについて，一層の充実を図った。平成20年改訂においても，我が国の歴史に関わる事象に影響を与えた世界の動きについては一層の関連付けを図って学習するように示してきたが，今回の改訂では，高等学校地理歴史科に「歴史総合」が設置されることを受け，我が国の歴史に間接的な影響を与えた世界の歴史についても充実させた。例えば，元寇をユーラシアの変化の中で捉える学習や，ムスリム商人などの役割と世界の結び付きに気付かせる学習など，広い視野から背景を理解できるよう工夫したものである。」[4)] このことからもわかる通り，高校地理歴史科の改変にともなって世界史の充実が図られたのである。しかしながら，５時間というわずかな時間数の増加では新たに扱う内容を大幅に増やすことには自ずと限界がある。そのため，中学校の歴史的分野では従来の学習内容においても，より一層強く世界を視野に入れることを意識して授業を構成する必要が生じるわけである。

こうした中学校社会科歴史的分野が直面している課題を踏まえて，本稿では世界を視野に入れた中学校歴史学習のあり方について，具体的な授業構想を示しつつ提起を試みたい。なお，具体的な授業の構想に当たっては，「「歴史総合」は従前の歴史領域の科目のねらいを総合的に踏まえつつ，世界とその中の日本を広く相互的な視野から歴史を捉える科目として内容構成した」[5)] という歴史総合の性格を踏まえて，そこへの接続ということや，さらには歴史総合のなかで十分とはいえない自分たちの暮らす「地域」という視点も考慮していきたい。地域－日本－世界のつながりを視野に，自分たちの暮らす津軽という地域で起こった歴史的事象を世界とのつながりのなかで考えるような視点を養うことになる授業を構想していきたい。

２．地域史と世界史

1990年代頃から，歴史学の分野では地域史の観点から従来の日本史像を再検討するような動きが強く見られるようなった。地域からの視点は，古くから見られたものだが，国民国家の相対化も意識してその動きが顕著となったのは1990年頃からではないだろうか。1988年，鹿野政直は『「鳥島」は入っているか』（岩波書店）で政権所在地中心の歴史像を転換することの必要性を指摘している。歴史科学協議会は，1998年度からの３年間，大会テーマに「歴史の方法としての地域」を掲げている。歴史学におけるこうした地域からの視点は，2000年代に入っても継続され，より明確に日本列島の諸地域を軸に据えた歴史像の再構築が進められた。河西英通『東北―つくられた異境』（中公新書，2001年）では，「東北」という地域概念が近代に入って構築されたものであることや東北という地域の特異性が論じられ，近代日本史像の見直しがなされている。また，2000年代初頭に相継いで出版されたシリーズである〈日本の歴史〉（講談社）や〈日本の中世〉（中央

公論新社）などでは，それぞれ『日本の歴史14 周縁から見た中世日本』（2001年），『日本の中世５ 北の平泉，南の琉球』（2002年）というように地域に視点を置いた巻が位置づけられている。東北という地域に焦点をあてた場合，河西の著作以降も多くの研究成果が蓄積され，2015年から16年にかけて，東北の歴史を再検討した〈東北の古代史〉シリーズ全５巻，〈東北の中世史〉シリーズ全５巻（ともに吉川弘文館）が刊行された。これらのシリーズによって，新しい視点からの東北史像や日本史像が提示されたといえよう。

さらには地域史研究の深まりの中で，日本列島の諸地域と世界史とを結びつけるような取り組みもなされている。河西英通・浪川健治・M＝ウィリアム＝スティール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ―多文化の歴史学と地域史』（岩田書店，2005年）では，「よりひろく世界史の新たな獲得の仕方，世界の新たな結合の展望として，地域史＝地域歴史学を提起すること」を目指している（６頁）。斉藤利夫『平泉―北方王国の夢』（講談社，2014年）は，北東アジアとの連関も視野に平泉政権を位置づけて論じている。梅津一朗・稲生淳編著『世界史とつながる日本史―紀伊半島からの視座』（ミネルヴァ書房，2018年）は，古代から現代に至る紀伊半島における歴史事象を世界史との結びつきのなかに位置づけた紀伊半島史といえる。歴史教育の立場からも，藤村泰夫・岩下哲典編『地域から考える世界史―日本と世界を結ぶ』（勉誠出版，2017年）が刊行され，日本史と世界史の総合的理解を模索し，日本列島の各地に世界史を見出す取り組みがなされている。また，藤村泰夫を中心にインターネット上に「地域から考える世界史プロジェクト」が立ち上げられ，歴史教育の立場から地域と世界史との結びつきを模索する活動も展開されている。

このように，歴史学，歴史教育の立場から，地域史の視点を活かした歴史像の見直しや，地域史と世界史の結びつきを模索するような動きが活発に行われている。しかし，こうした歴史学や歴史教育における地域史研究の成果やその視点が，新設の歴史総合には十分に活かされているようには見えない。中教審答申や学習指導要領等を読む限りにおいて，日本史と世界史の融合と言われるなかにおいて，どれほど地域が意識されているのかは見えてこない。政権所在地を中心とした日本史と世界史との融合である限り，学ぶ主体であるはずの日本各地で暮らす生徒たちにとっては，「政権所在地という遠い世界」と「外国という遠い世界」との融合となり，自身の生活世界との乖離から学ぶ意義を見出せなくなる可能性も懸念される。

また，日本史と世界史との結びつきを考える場合には，それぞれの地域の特性を意識することも必要となろう。例えば，先述の『世界史とつながる日本史―紀伊半島からの視座』では，「エルトゥールル号遭難とオスマン帝国の衰退」という章が設けられ，19世紀末の日本とオスマン帝国の結びつきについて論じられている[6)]。これは日本史と世界史の融合の一つのあり方を示している。しかし，この題材をそのまま津軽に暮らす生徒たちに提示することは困難であろう。それぞれの地域の視点から世界史との接点，結びつきを考えていくことが求められている。自らの暮らす地域から世界史との結びつきを見出すことや世界史の流れの中に地域の歴史事象を位置づけることが，世界史を身近なものと考え，学ぶ意義を見出すことにもつながるであろう。先述の斉藤利夫『平泉―北方王国の夢』は北東アジアを視野に平泉政権を論じているが，津軽という地域を想定して地域－日本－世界との結びつきを考える際には，北東アジアやロシアといった北方世界を意識していくことが必要となろう。

以上のことを受け，具体的な授業構想に向けて，近世の津軽に起こった歴史事象である「民次郎一揆」と，その要因につながっていったロシアの蝦夷地周辺への進出ということについて検討を加えていきたい。

３．民次郎一揆とロシアの東方進出

3-1　民次郎一揆と北方警備

民次郎一揆とは，1813（文化10）年に弘前藩の領域で起こった大規模な一揆で，藩に年貢の減免を一部認めさせるなど，その後の弘前藩にも大きな影響を残した一揆ある。まず，この民次郎一揆の概要について瀧本壽史の論考をもとに整理しておきたい[7)]。

1813年９月28日，藤代（現弘前市と北津軽郡鶴田町地域）・高杉（現弘前市と西津軽郡鰺ヶ沢町地域）・広須（現つがる市地域）・木造新田（現つがる市地域）の４組，岩木川左岸の百姓約2,000人が，年貢減免などを求めて弘前城北門（亀甲門）外に強訴に及んだ。鬼沢村（現弘前市鬼沢）の民次郎が首謀者とされたことから「民次郎一揆」と呼ばれる。百姓たちが強訴に及んだのは不熟作が原因ではなく，30年前に比べて百姓の負担が３倍にもなっていたからだということである。百姓の負担が大幅に増加した理由としてあげられて

いるのが，蝦夷地警備に向かう公儀役人などへの人馬の供給や百姓が郷夫として蝦夷地に動員されることからくる農村の疲弊，そして年貢の増徴を目的として行われた新田・廃田の開発，隠田（藩に隠して年貢を納めない田地）・縄延地（帳簿上より広い土地）の摘発であった。特に蝦夷地警備に動員された百姓の数は出兵総数の大半を占め，労働力不足となって農耕に直接的な影響を与えていた。そのために，百姓の潰れも多く見られるようになり，開発と蝦夷地警備は相乗的に農村を疲弊させることになっていった。これは弘前藩領の全域に関わることであり，百姓一揆は広域化することになった。実際のところ，民次郎一揆以外にも大規模な百姓一揆が1813年９月には集中して起こっている。９月22日の駒越組（現弘前市と中津軽郡西目屋村および西津軽郡鰺ヶ沢町地域），同24日から25日にかけての猿賀組（現黒石市と平川市および南津軽郡田舎館村地域），同26日の大光寺組（現平川市地域）・尾崎組（現平川市地域）と相継いで百姓たちが立ち上がった。そして９月28日の民次郎一揆へと続いている。民次郎一揆が要求した年貢減免は一部認められることになるが，それは民次郎一揆のみの成果ではなく，その前段階の動向があったからこそ勝ち得たものといえる。これらの一揆を一連のものとして捉え「文化惣百姓一揆」と呼称されることもある。

この1813年９月の百姓一揆では多くの百姓が処罰されたが，斬罪となったのは「高杉組鬼沢村彦兵衛次男民次郎」ただ一人であった。首謀者については最後まで判然としなかったが，藩の役人に願書を手渡し，終始首謀者であることを主張したためであったとされる。罪を一身に背負い，22歳で極刑となった民次郎は，その後人々に語り継がれ，明治に入ると義民として顕彰された。なお，民次郎一揆の呼称が一般化してくるようになったのは昭和30年代以降であるという。

以上が，民次郎一揆の概要であるが，ここまで見てきてわかるように百姓一揆の直接的な背景には蝦夷地警備，いわゆる北方警備があった。

1792年，ロシア使節ラックスマンが根室に来航した。通商と漂流民である大黒屋光太夫らの送還が来航の目的であった。幕府は，長崎以外での交渉には応ずることができないとして，光太夫らの送還を受け入れるのみで，通商交渉には応じることなく長崎への入港許可証である「信牌」を与えるという対応をとった。この信牌を持ってラックスマンはロシアへと帰国していった[8)]。このころロシア以外の外国艦船も蝦夷地付近に姿を現していたことを受けて，幕府は蝦夷地を直轄地とし，弘前藩や盛岡藩を中心に東北諸藩に蝦夷地警備（北方警備）を命じたのである。そのような状況下，1804年にロシア使節レザノフが通商を求めて長崎に来航した。レザノフは，ラックスマンが与えられた信牌を携えていた。しかし，幕府は長く待たせたあげく，翌1805年３月に通商要求を拒絶した。これを受けてレザノフは部下に報復の遠征を指示したのである。レザノフの命を受けた部下たちが，1806～07年にかけてサハリンや択捉島を襲撃した[9)]。これにより日本とロシアの間には大変な緊張関係が生じ，北方警備も一層強化されることになった。緊張関係のピークとなった1807年には，弘前藩の出兵数は宗谷や斜里などで1,002人にも及んだ。この出兵のなかには雑役をおこなう郷夫として徴用された百姓が多く含まれていた。また，彼らのなかには極寒の宗谷や斜里での越冬を余儀なくされた者も少なくはなかった（越冬者数は603人[10)]）。ことに斜里での越冬は厳しいものとなり，多くの郷夫が浮腫病にかかり命を落としている[11)]。

このように，北方警備は弘前藩領の百姓に大きな負担を強いるものとなったのであった。いわば，ロシアの動きが津軽の百姓一揆を引き起こしたともいえるのである。

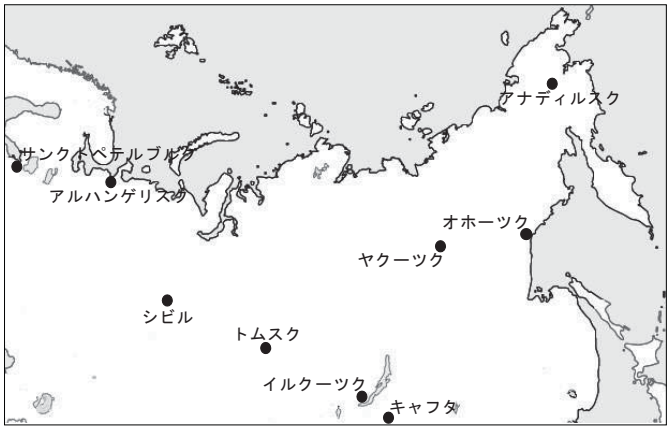
なお，このときの犠牲者を追悼するために北海道斜里町には1973年に「津軽藩士殉難慰霊碑」が建立され，現在も毎年７月に慰霊祭とともに「しれとこ斜里ねぷた」が行われている[12)]。

3-2　毛皮需要の高まりとロシアの東方進出

それではなぜロシアは蝦夷地周辺に姿を現したのだろうか。次に，ロシアが蝦夷地周辺に姿を現すに至った背景について整理していきたい。

16世紀後半，ロシア帝国のシベリアへの進出が本格化し始めた[13)]。1582年にはイェルマークがシベリア西部にあったシビル＝ハン国を占領した。17世紀に入ると，ロシアは広大なシベリアを東へと着実に勢力を拡大していった。1604年にはオビ川の上流に要塞トムスクが建設され，本格的なシベリア征服が始まった。以後，シベリアの河川網に沿う形で征服が進められ，交通の要衝には砦や要塞町が建設されていった。1632年にはレナ川水系の中央部でこの地域の交通の要衝となる土地にヤクーツクの砦が築かれた。レナ川はロシア

最大の大河で有り，その水系の流域はバイカル湖付近からオホーツク地域にまでおよぶものであった。そのため，以後ヤクーツクはロシアにとって東部シベリア征服の拠点となった。そして，ヤクーツクを拠点として，ロシアはさらに東方に進出し，1649年にはオホーツク海に到達してオホーツク要塞を建設した。ヤクーツクから東に約760㎞の場所であった。ヤクーツクを拠点とした征服は北東方向，すなわち現在のベーリング海峡方面へも進められた。同じく1649年にはベーリング海近くにアナディル要塞が建設されている。



ロシアのシベリア進出関係地図

一般に1649年のオホーツク要塞とアナディル要塞建設がシベリア征服の完了と見なされているという[14]。ロシアは急速に東方へと勢力を拡大し，イェルマークのシビル＝ハン国の征服以降，わずか70年ほどでオホーツク海，ベーリング海に至る広大なシベリア地域を征服したことになる。

広大なタイガとツンドラに覆われたシベリアへのこうしたロシアの急速な進出の目的は毛皮の獲得にあった。ロシアは毛皮の供給地としてのシベリアに着目していた。クロテンやキツネ，リスなどの毛皮を求めて，ロシアはシベリアを東へと進んだわけである。毛皮の中でも，特にクロテン（いわゆるロシアン・セーブルで，現代でも最高級の毛皮とされる）は，毛皮の質も良く，珍重され高価で取引された。16 ～ 17世紀に，ロシアはクロテンを中心とした毛皮をオスマン帝国やペルシア，そしてヨーロッパへと輸出して，貴金属，武器，織物，胡椒などを輸入した。さらに，18世紀になると中国の清朝も重要な毛皮の輸出先となっていった。そして，19世紀には清朝が最も大量の毛皮を輸出する相手となっていったのである。シベリアの毛皮は，一度バイカル湖畔にある中継交易都市イルクーツクに集積され，そこからヨーロッパ方面へは白海沿岸のアルハンゲリスクやバルト海沿岸のサンクトペテルブルクの港を経由して輸出されていった。また，中国へは現在のモンゴルとロシアの国境にあるキャフタの交易場を通じて毛皮が輸出されていった。

16 ～ 17世紀の西ヨーロッパでは主権国家体制が形成され，絶対王政が確立されていった。また，一方では市民層の成長が見られ商工業も盛んとなっていった時期でもある。こうした経済的な成長が西ヨーロッパにおける毛皮需要の高まりを生んだわけである。中国では，清朝が成立し，17 ～ 18世紀にかけて，康熙帝・雍正帝・乾隆帝の３代の皇帝のもと，全盛期をむかえて領土も拡大し，経済力も大いに高まっていった。こうした経済力の高まりが，中国社会における高級毛皮の需要の高まりという現象をもたらしたわけである。ロシアが東方へと進出する根底には，西ヨーロッパや中国における社会の大きな変化が存在していたのである。西ヨーロッパや中国おける社会の変化は，毛皮需要の大きな高まりを生み，毛皮はロシアにとって重要な輸出品となっていった。ロシアは重要な輸出品である毛皮を獲得すべくシベリアを東へと進んだわけである。

ところが，18世紀に入るとクロテンは乱獲の影響を受けて数が減少し，輸出用の毛皮が十分に確保できない状況が生じ始めた。そのために，ロシアはクロテンを求めて，カムチャツカ半島やベーリング海峡対岸（はじめは海峡であることは確認されていなかった，1728年にベーリングが海峡であることを確認）の方面へと食指を伸ばしていったのである。さらには，クロテンなどに代わる毛皮として，アザラシやオットセイなどのオホーツク海やベーリング海（北太平洋）のような極寒の海に暮らす海獣の毛皮にも着目するようになっていった。

これらの海獣の毛皮のなかでも特に注目されたのがラッコの毛皮であった。「もともと陸生動物であったラッコは厳寒の海で生活する動物のなかでは皮下脂肪の少ない動物であった。彼らが寒さの中で生き抜くためには，体毛の密度を高くし，その中に断熱のために空気を多く含ませることが必要であった。その構造を持つラッコの毛皮は，クロテンよりも毛並みが良いだけでなく，丈夫で防寒性，耐水性にすぐれた非常に上質なもの」[15] ということである。クロテン以上に良質な毛皮ということから，ラッコの毛皮は中国やヨーロッパでの需要が急速に高まり，クロテンに代わるロシアの主要な輸出用毛皮となっていった。良質な毛皮をと

ることができるラッコの生息地は，主に千島列島，カムチャツカ半島沿岸から北米北西岸である。18世紀，ロシア人はラッコを求めて，オホーツク海や北太平洋に乗り出し，カムチャツカ半島から千島列島を南下して，択捉島，国後島と蝦夷地周辺に姿を現すようになっていったのである。ちなみに，択捉島の北隣にあるウルップ島は別名「ラッコ島」と呼ばれるほどのラッコの一大生息地である。1792年にラックスマンが派遣された目的は，「本国から遠く離れ，毛皮猟にかかせない弾薬や，狩猟用具，それになによりも必要な食料・日用品の補給が困難であった」[16] ことから，これらの供給を日本に求めるためでもあった。

ここまでみてきたように，西ヨーロッパにおける絶対王政の成立や市民層の成長，中国における清朝の成立とその経済発展という大きな世界史の流れのなかで，ロシアは毛皮を求めてシベリアから北太平洋へと進出した。そして，18世紀後半にはロシア人は頻繁に蝦夷地周辺に姿を現し，日本との接点を持つようになっていったのである。ヨーロッパ，中国，ロシアといったユーラシア大陸規模での大きな世界史の流れのなかに弘前藩の北方警備は位置づけられるわけであり，津軽の百姓たちもまた世界史の大きな流れとは無関係ではいられなかったのである。

4．「世界史の中の民次郎一揆」の実践展開

地域－日本－世界のつながりを視野に，自分たちの暮らす津軽という地域で起こった歴史的事象を世界とのつながりのなかで考えるような視点を養うために，民次郎一揆とロシアの動きは格好の題材となり得よう。民次郎一揆という津軽の歴史事象の向こう側にはロシアがあり，さらにその向こう側には西ヨーロッパや中国社会の変化が存在しているのである。津軽から世界史を考え，世界史の流れのなかに津軽をおいて考えるわけである。以下，実際におこなった実践「世界史の中の民次郎一揆」について述べていきたい。

授業は，弘前大学教育学部附属中学校でのTuesday実習[17] という３年次の実習プログラムの一環として，大学生に授業の進行や生徒の様子を観察させることも意識し，2020年10月27日の５・６校時の２時間連続でおこなった。対象となった生徒は中学１年生の選択者16名である。Tuesday実習の一環ということで，特設の単元を設けての授業ではあるが，通常の通史学習への応用も意識して取り組んだものである。授業の目標及び学習課題は以下の通りである。

〈１時間目〉

目標：

① 北方世界で大きく歴史が動いていたことに気付き関心を向けることができる（主体的に学びに向かう姿勢）

② 史資料をもとに弘前藩の北方警備の実像について理解することができる（知識・技能）

学習課題：「どうして斜里にねぷたがあるのか？」

〈２時間目〉

① 津軽の農民の行動を世界の動きの中でとらえ，自身の言葉で表現することができる（思考・判断・表現等）

学習課題：「どうして農民たちは立ち上がったのだろう？」

授業は全体として，学習課題を設定し，その課題を検討していくために，下位のいくつかの小さな問いをたてるとういう構成とした[18]。いくつかの小さな問いについては，史資料や対話（生徒と生徒，生徒と教師）等により解を探っていくという方法で進めた。歴史的分野の授業ではあったが，歴史認識と空間認識とを密接に関連づけて生徒には捉えてもらいたいとの思いから地図帳（帝国書院『中学校社会科地図』2015年検定済）を活用することを意識した。また，中学１年生対象の授業ではあったが，歴史学習における史資料の重要性を意識し，原典史料も含めてやや難解と思われるものも準備し，活用を試みることにした。

１時間目では，斜里ねぷたや津軽藩士殉難碑を手がかりに，斜里と弘前の関係，斜里の気候等を踏まえた弘前藩の北方警備の実情を授業内容の中心に据えた。２時間目では，弘前藩の北方警備には，武士だけではなく多くの農民たちが駆り出されたことや農民が多くの経済的負担を強いられたこと，毛皮を目的としたロシアの南下や毛皮交易についての内容を取り扱った。このうち，１時間目に関しては後期Tuesday実習の第１回目（選択した生徒は全てのクラスから集まった16名でこのときに初めて顔をあわせている）というこ

とも考慮して，生徒の様子を把握するということやアイスブレーク的な意味合いも込めて導入の時間を長めにとることにした。そのために内容的には２時間目に比べてしぼり込んでいる。なお，この授業を実践したときは，弘前市内の新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受け，附属中学校では時差登校を実施しており，45分の短縮授業であった。

実際の授業展開は以下に示す通りである。

【１時間目】

段階	学習内容	教師の働きかけ	留意点・資料等
導入	斜里ねぶた	・斜里ねぶたの画像を提示 問）これは何の画像？ ・斜里ねぶたのポスターを提示 →ポスターをよく見るよう促す （弘前ではなく北海道斜里町のねぶたであることに気づかせる） ・地図帳で斜里の位置を確認させる	・「斜里」の文字を隠して提示 地図帳137頁
展開		どうして斜里にねぶたがあるのだろう？	
	「津軽藩士殉難」	・ポスターを再度提示 →「津軽藩士殉難慰霊祭」の文字に着目させる （津軽と斜里との関係に気づかせる） →「津軽藩士殉難」についてふれる	・「津軽藩」「殉難」という言葉に着目させ考えさせたい
	北方警備	問）北方とはどこだろう？ 何のための警備だろう？ →ロシアによるエトロフ攻撃や弘前藩の警備地についての資料①②を読むように指示 ・年表（資料③）をもとにロシアの南下について時系列で説明する	・ロシアに目を向けさせたい 資料①『新編 弘前市史 通史編２（近世１）』より 資料②『図説　青森県の歴史』河出書房新社より 資料③吉村和夫『北方警備と津軽藩』ワープロ出版より
	斜里での津軽の人々の様子	問）北方警備の犠牲者はなぜ亡くなったと思う？ ・斜里の気候を確認する →弘前と斜里の気温を比較させる（資料⑤） →厳寒の斜里での過酷な越冬の様子を確認する（資料⑥⑦） ・この時，ロシアとは戦っていないことを伝える （ロシアとの戦闘ではなく斜里の寒さや栄養不足が原因であったことに気づかせる）	・ロシア南下の目的に目を向ける者がいた場合には次の時間で触れることを伝える 資料⑤気象庁「各種データ・資料」より 資料⑥⑦『松前詰合日記』より ・時間的余裕があれば斜里と昭和基地を比較させる（地図帳12頁）
終末	まとめ	・ここまでにわかったこと気づいたことを整理してまとめるよう指示 →発表・意見交流	・ワークシートに記入させる

【2時間目】

段階	学習内容	教師の働きかけ	留意点・資料等
導入	民次郎一揆	・弘前城亀甲門の画像を示す 問）何だかわかりますか？ ・「義民藤田民次郎の碑」の画像を示し，資料をもとに1813年に一揆の農民が城に押し寄せたことを伝える（資料⑧⑨）	・民次郎の碑がある自得小学校の位置を確認する 資料⑧『新編 弘前市史 通史編2（近世1)』より 資料⑨一揆関係略図
展開		どうして農民は立ち上がったのだろう？	
	北方警備の負担	問）農民はどんな時一揆をおこすと思いますか？ ・資料をもとに一揆の背景を確認する →「公儀方人馬賃銭」「松前郷夫出銭」に着目することを促す（飢饉が原因ではないことに気づかせる） →「郷夫=百姓」，斜里で多くの農民が犠牲になったことをふれる（一揆と北方警備との間に関りがあることに気づかせる）	・小学校での学習を振り返らせる 資料⑩『津軽歴代記類下』 ・資料が中学生には難解なため適宜解説
	ロシアの南下	問）ロシアが来たことが一揆に関係しているけれど，ロシアは何しに来たの？ 問）ロシアはオホーツク海に何かをとりに来ていたけれど何だと思う？ →南下の理由が海獣の毛皮であることについて資料をもとに確認させる（資料⑪） ・「猟虎」の毛皮が目的であったことを伝える →ラッコの画像を提示する	・南下の理由がなかなか思い浮かばなくてもよい ・前時の資料も参照 資料⑪『図説　青森県の歴史』河出書房新社より ・ラッコの毛皮が高価であることを補足
	ロシアの毛皮交易	問）ラッコの毛皮どうするの？ 問）毛皮は売るのですが買うのは誰でしょう？ →ラッコの毛皮が輸出用であることに気づかせる ・毛皮貿易の拠点であるイルクーツク，キャフタ，アルハンゲリスクの位置を確認するよう指示 →西欧や中国に輸出していたことを伝える ・毛皮を輸入した18世紀の西ヨーロッパや中国についてふれる	・毛皮の輸出先に目を向けさせたい 地図帳46，55頁 ・詳しくは高校での学習のため深くはふれない
終末	まとめ	◎農民はなぜ立ちあがったのだろう →まとめの記入を指示 →発表・意見交流	ワークシートに記入させる

当初，通常の授業時間（50分）を想定していたのだが，短縮授業（45分）となったために，1時間目・2時間目ともに，終末の場面で十分に時間を確保することができず，結果的にまとめについて生徒たちの発表の場面や意見交流の場面を設定することができなかった。

5．おわりに

授業の最後に生徒たちがどのような言葉でまとめたかを全体で共有することはできなかったが，書いているものを確認したところ，①「ロシアが毛皮を輸出して儲けるために日本の近くにやってきて，そのための北方警備で農民が苦しんだ」，②「ロシアが毛皮をとるために日本の近くにやってきて，そのための北方警備で農民が苦しんだ」といったまとめに大別できた。ほとんどのものがどちらかの趣旨の内容をまとめていたが，②のようなまとめを書いた生徒のほうが多く見られた。この二つのまとめは，一見するとほぼ同様のものと見ることもできるのだが，②のほうは，ロシアと日本（津軽）との関係の中でのみ事象を捉えているのに対して，①のほうは，ロシアによる毛皮の輸出というロシアからさらにその先の世界までが視野に入っ

たまとめになっている。②のようなまとめを書いた生徒のなかに，ロシアから先の世界が視野に入っていなかったとは言い切れない側面もあるが，やはりまとめの言葉として出てこないということはロシアと日本との関係性が認識のほとんどを占めていたと考えることができよう。高校で学ぶ歴史総合との接続という視点から考えると，②のように二国間（あるいは二地域間）の関係のなかで歴史の動きを捉えるよりも，①のように多様な地域との関係性のなかで歴史の動きを捉えられる見方ができるようになることがより望ましいものであるといえよう。なお，①のようなまとめをした生徒のなかに，具体的な輸出先として中国をあげている生徒もみられたが，ヨーロッパという言葉については確認することができなかった。

①のようなまとめに至る生徒が少なかった原因としては，やはり時間の不足ということが考えられる。当日の短縮授業の影響もさることながら，そもそもの指導計画のなかで，輸出先の問題について十分に検討する時間を確保していなかったことがあげられる。もう少し丁寧にロシアの毛皮輸出のことを位置づけるべきであったと考えている。さらには，毛皮の輸出先として，中国について触れる者はいたが，ヨーロッパについて触れる者がいなかったことについては，毛皮の産出地とヨーロッパとの物理的な遠さも関係しているのではないかと考えている。地図帳も活用しながら授業は進めたが，シベリアを地図で見るとすぐ南に中国は確認できるが西ヨーロッパはそのページから切れており描かれていない。西ヨーロッパはいかいも遠い存在となってしまっていた。毛皮を運搬する様子（日数や輸送手段など）について少しでも触れておく必要を感じた。授業時間の制約もあるが，検討の余地が大いにあると考えている。

不十分な授業実践ではあったが，少しは生徒の認識変容をみることができたのではないだろうか。１時間や２時間程度の授業で，生徒の意識のなかに地域－日本－世界を結んだ歴史の見方を育成することは到底不可能である。こうしたことの積み重ねが世界へと視野を広げていくことにつながり，歴史総合を学ぶなかで地域－日本－世界を結んだ歴史の見方が形成されていくことを期待したい。

最後になるが，授業後に「弘前の一揆のことが外国とつながっていって面白かった」という素朴な感想を述べてくれた生徒がいた。自分たちの暮らす地域が世界とのつながりを持つことの意外性から面白さを感じてくれてのだと思う。知的好奇心を喚起することは，主体的な学びを成立させる上で重要となってくる。自らの生活世界と世界史が接点を持つことに気づくことで，主体的な学びの姿勢や自主的な世界史像の形成につながっていくものと確信している。

【註】

1) 小学校においては，３年次より地図帳を用いた学習が取り入れられるようになったことや６年次に政治学習を先習としたことなどの変更が見られた。最も大きな変更が見られたのは高校である。地理歴史科では新たに「地理総合」,「歴史総合」が創設され，公民科においては「公共」が創設されるというように大幅な科目再編がなされた。また，これら新設の３科目は全て必修化された。

2) なお，公民的分野では時間数の変更がなされなかったが，学習内容としては，変化の激しい時代にあって「現代社会の諸課題」において人工知能の急速な進化，ワーク・ライフ・バランスの考え方を取り上げる等の変更はなされた。

3)「令和２年度大学入試センター試験実施結果の概要」（独立行政法人大学入試センター）に記載された地理歴史科の受験者数をみると，世界史Ａが1,765人，世界史Ｂが91,609人で，合計は93,374人であった。これは，日本史Ａ・Ｂの合計162,854人や地理Ａ・Ｂの合計145,276人と比較して著しく少ない受験者数であった。世界史が必修とされているにもかかわらず，このような結果となっていることからも，高校生が世界史を忌避している傾向の一端が見て取れるのではないだろうか。

4)『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』（2018年３月発行），19 ～ 20頁

5)『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』（2019年３月発行），23頁

6) 梅津一朗・稲生淳編著『世界史とつながる日本史―紀伊半島からの視座』（ミネルヴァ書房）2018年，209 ～ 220頁

7) 民次郎一揆の概要整理にあたっては次の論文を参考とした。瀧本壽史「義民・民次郎一揆再考」長谷川成一監修，浪川健治・河西英通編『地域ネットワークと社会変容―創造される歴史像―』（岩田書院）2008

年所収

なお，「民次郎」という人物が実際には存在していなかった可能性も語られている。瀧本は論文のなかで「それを補う傍証がないのである。あるのは口承のみである。にもかかわらず，民次郎が一味したであろう百姓一揆は事実として起こっている。「民次郎」は一揆に加わった多くの百姓を象徴的に代表させた民衆表記として「民次郎」なのである」と述べている。(238頁)

8) 木崎良平『漂流民とロシア―北の黒船に揺れた幕末日本』（中央公論社）1991年，68 ～ 71頁参照

9) 『新編 弘前市史 通史編２（近世１）』565 ～ 566頁

10) 吉村和夫『北方警備と津軽藩』（ワープロ出版）1989年，312頁に掲載の表による。

11) 斜里での越冬の様子やその過酷さについては，弘前藩士斎藤勝利の記した勤番日記である『松前詰合日記』に詳しく記載されている。

12) 北海道斜里町ホームページ「しれとこ斜里ねぷたの紹介」
（https://www.town.shari.hokkaido.jp/shiretokosharineputa/2016-0514-1020-3.html，2020年12月25日閲覧）

13) ロシアのシベリア進出及び毛皮交易に関しては，次の二つの文献を参考にした。森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易―16 ～ 19世紀シベリア・北太平洋の商人世界』（彩流社）2008年，宮崎正勝『北からの世界史―柔らかい黄金と北極海航路』（原書房）2013年

14) 森永貴子，前掲書　46 ～ 47頁

15) 小瑶史朗・篠塚明彦編著『教科書と一緒に読む 津軽の歴史』（弘前大学出版会）2019年，101頁

16) 木崎良平，前掲書　67頁

17) Tuesday実習は弘前大学教育学部における３年次の教育実習の一部としておこなわれるものである。年間を通して火曜日の午後に10回（前期５回，後期５回）実施され，観察実習と教壇実習とを組み合わせて進められる。①長期のわたる継続的な観察を通して，児童生徒の学習過程やその変容について理解する，②集中実習を基礎に設定した課題による授業作りを通して，教師としての資質・能力をいっそう高める，という二点をねらいとしている。

18) 大きな問いと小さな問いをたてるという構成の仕方については次の文献を参考にした。刈谷剛彦・石澤麻子『教え学ぶ技術―問いをいかに編集するのか』（筑摩書房）2019年

＊　付記

本稿は，令和２年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号20K02723）の助成を受けた成果の一部です。